



催眠奴隷2マフター

～恋人と過ごす夏休み～

プロローグ

『恋人との勉強会(?)』

篠宮クロエ。

彼女は俺の一学年上の先輩で、図書委員長をしている。

俺はほんの数カ月前、彼女に告白し、ふられ——

紆余曲折を経た後に、将来を誓い合う仲になった。

大好きなクロエを恋人とした俺は、充実した日々を送っている。

平日の放課後には図書室で顔を合わせ、

委員会の仕事が終わると俺の家に移動して二人で過ごす。

休日は、朝から晩まで一緒にいることが多い。

両親が海外赴任中だからこそできる荒技だ。

そしていまは夏休み。

当然のように、クロエは毎日朝から俺の家に来る。

そして二人で勉強会を開催することになっていた。

——玄関のチャイムが鳴る。

どうやらクロエが到着したらしい。

「おはよう……ごめん。準備があって、遅れた」

「気にしないで。ほら、入って」

「ん……おじゃまします」

少し気弱だが気立てのいいクロエ。
彼女と過ごす時間は、俺にとって心地いい。
これまでの人生で、一番幸せな日々かもしれない。

——だけど、俺には彼女のこと
で悩みがひとつだけある。



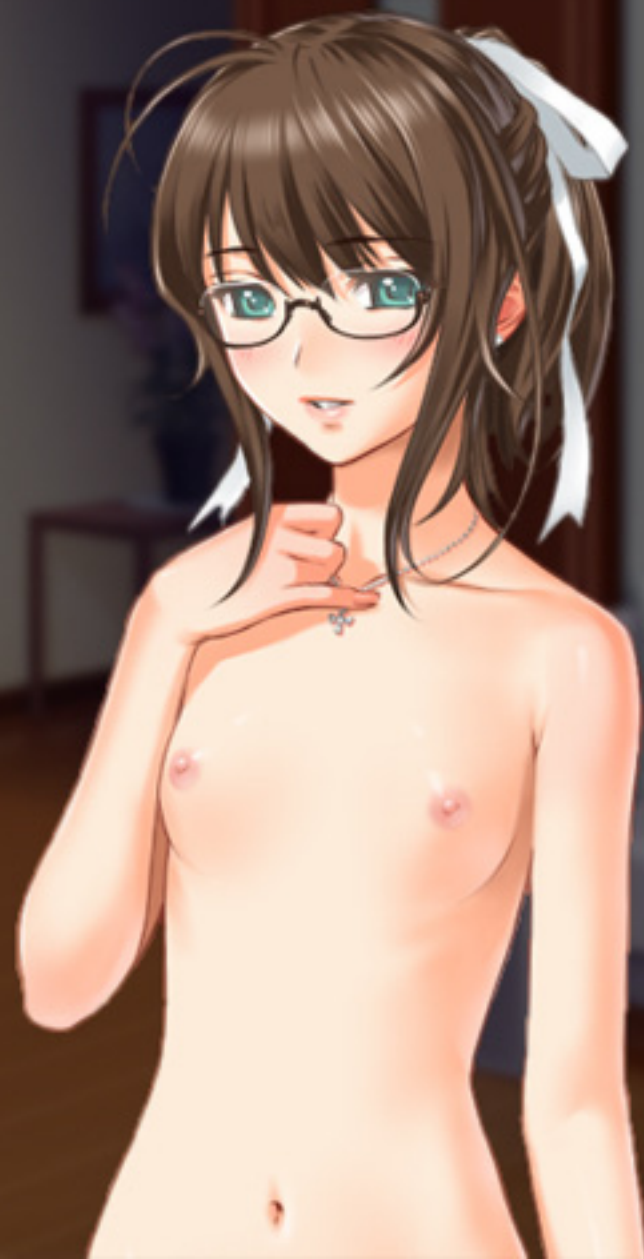
室内に入ったクロエは、おもむろに服を脱ぐ。

「じゃあ、はじめよ？」

「え……」

——俺の悩み。

それは、彼女があまりにも
エロいことに積極的すぎるということだ。





「——アハハハ
アハハハハ、アハハハハ」

どう答えるべきか、一瞬迷う。
「……アブノーマルな感じがして、
素直に楽しめない」

ついでに
気になったことを訊く。
「どうか足でするのって
大変じゃない？」

「……実は
ちよつと、しりぞいて」



「じゃあ、やめない？」
「……ん。このやり方は、
もうやめる」
そう言っていると
彼女は俺の股間に
顔を近づけた。





「かわりに、いつも通り
口にちようだい？」



「んっ……
ちゅっ………んっ」
俺の股間に
顔を埋めた彼女の口から、
イヤらしい音が響く。

足で刺激されて敏感になつているところを、彼女の舌が追い打ちをかけるように急ぎ立てる。



部屋に広がるエッチな匂いと、
股間を刺激する彼女の吐息が
俺の脳天まで貫き、
我慢の限界はすぐにやってきた。






「クロエっ……もっ、っ……」
「んっ……」
クロエはごくぐくと
喉を鳴らして精液を飲む。

「……ん、ごちそうさま」
口に収まりきらなかった
精液をたらしながら、
彼女は微笑んだ。





「じゃあ、次は……
わたしのなかに、ちようだい？」
いつものように
扇情的なポーズで俺を誘う。
そんな彼女に、俺は——



「ストップ！」

「……え？」

——制止の言葉を投げかけた。

「…………なに?」

行為を中断されたクロエは、
不満そうな顔で俺を見る。

「いや、このままで流されておいて
しまっただけど…………」



「今日は勉強会じゃなかった?
なんでエッチしてるの?」

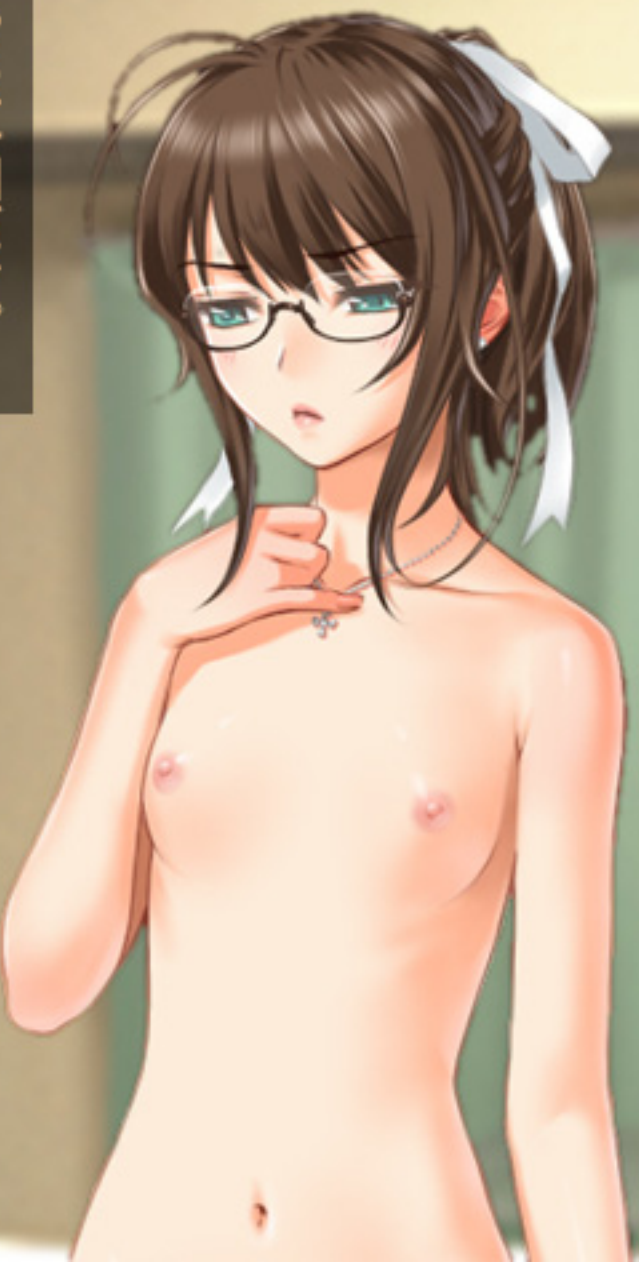
「……性の勉強会？」

「ちやかさないで」

「……むっ」

可愛く頬を膨らませて不満そうな顔を見せる。

しかし、騙されてはいけない。



「……じゃあ、一回だけ。」

「一回したら勉強するから」

彼女がねだるようにこちらを見上げてくる。

そのしぐさに心を動かされて、何度流されたことか。

「確か、この前もそんなこと言って、」

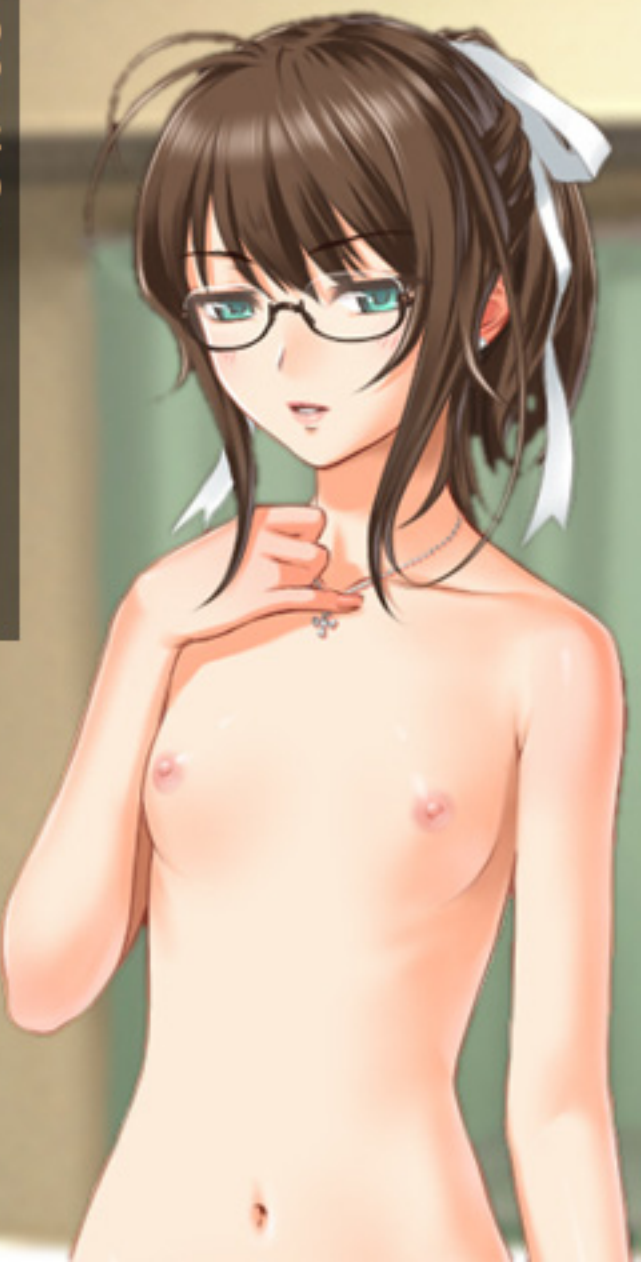
五回くらい連続でした気がするけど?」

しかもそのときは、勉強せずに一晩中やっていた。

「……………」

ふてくされる彼女に、
俺は追い打ちをかける。

「夏休みの課題、三年はかなり多い
はずだけど終わったの？」



「……………終わった、わ」

あからさまに目をそらされる。

どう考えても終わっていない。
まあ、わかっていたことではある。
長期休暇に入ってから毎日、
朝から晩までエッチニ味なのだから、
手をつける時間などなかっただろう。

「このままただれた生活を続けていては
俺もクロエもダメになる」

「……そんなこと、ないわ」

返答まで間があったのは、

彼女自身にも思う所があったからだろう。



だから俺は宣言する。

「とっつわいで、」

今日からエッチは禁止でー！」

「え……………？」

「そんな……ひびく」

いまにも泣き出しそうな顔で
彼女は俺を責める。

「うっ……」

なんだか悪者になった気分だった。



「と、とにかくそういふことよー」

俺は先に勉強の準備をしとくから、
服を着たら、リビングに来てー」

鈍りそうな決心を保つため、

そうまくしたて、部屋を出た。

「あ……待って」
背後からそんな呟きが聞こえる。
しかし、俺は聞こえなかったふりを
して、そのまま部屋を出た。



「……………バカ」

——俺はリビングで溜息をつく。

「バカ、かあ」

付き合ってから、はじめて言われた。

なんてことない言葉だが、胸に響いた。

かつて図書室でクロエに催眠術を

かけた日のことを思い出したからだ。

「あのときは辛かったな……」

——いや、違う。

辛かったのは彼女のほうだろう。

あのとき、俺はちょっとした冗談のつもりで、
当時片思いしていたクロエに催眠術をかけた。

誤算だったのは、彼女が本当に

催眠にかかってしまったことだった。


俺は当時のことを思い返す。

——片思いの相手に催眠術をかけて
言いなりにしようとした。



その事実をもみ消すために、
俺は催眠状態の彼女の痴態を撮影し、
それをネタにして彼女を脅して奴隷として扱った。





——それがきつかけとなって、
いまや彼女は俺の恋人になっているのだから、
人生何が起ころのかわからないものだ。

しかし、俺はあのとときクロエを傷つけた。
その過去は消えない。

だから、俺は人生を賭けて
彼女を幸せにすると決めたのだ。

最近、クロエは俺に依存しすぎているように思う。

「やっぱり、このままじゃいけないよな」

将来のことを考えれば、

お互いに依存しあうような関係を
続けるべきじゃないと思う。

夏休みを活用して、

いろいろやっておきたいこともある。

しかし、こんな風にエッチ三昧の日々が
続いていては体力も時間も足りない。

『エッチ禁止』というのは、

いまの状況を変えるための苦渋の決断だ。

彼女はショックを受けていたが、
きつと納得してくれるだろう。

——だけど、物事はそう思い通りには進まない。

俺はこのとき気付くべきだった。

彼女を俺の部屋に一人で残した。

そのことが、どんな事態を引き起こすのかという点に——。



to be continued...